



Essay

ことばがもたらす 「自由」と「権利」の認識

慶應義塾大学環境情報学部教授

今井むつみ

いまい むつみ



「わび」「さび」という言葉は非常に深遠で抽象的な意味を持つとさえいえない概念であるはずと思っていた。しかし、翻訳思想家の柳父章がこれらのことばは「美」ということばよりもずっと具体的であるということを書いており、なるほど、と得心した。例えば「わび」は茶の湯や水墨画、和歌など特定の日本古来の芸術様式に限定的に使われるという意味で、範囲が限定された概念である。対して「美」とは人の容姿、声、絵画、花、詩、音楽、散文、舞踊など、極めて広範で普遍的な対象の属性を網羅して表す概念であり、その意味で非常に抽象的な概念である。しかもこの「美」ということばは、元来日本語にあった言葉ではなく、明治期に「beauty」という語の翻訳語としてつくられた言葉である。しかし、その対象の広範さの故か、現代日本語のなかで「わび」「さび」をはるかに凌駕した日常語となり、私たちはもはやこの言葉に抽象性を感じない。花にも絵画にも人の容姿にも動きにも共通した、「美」という客観的な知覚特徴があるように感じてしまっているのである。

同様のことは「権利」「自由」などにもいえる。現代のわれわれの社会のなかで最も中核となるこれらの概念もまた、日本には伝来は存在しなかったものであり、明治期に翻訳語としてもたらされた、いわば言葉がつくった概念である。人はこれらの抽象的な概念を指す言葉をどのく

らいよく理解しているのだろうか。「美」や「自由」という言葉は小学生でも「知っている」と思っている。しかし大人でも、きちんとその意味を定義できる人は多くないし、その意味が他の言語を話す社会では違うかもしれないと意識しながらこれらの言葉を使っている人は少ない。「権利」「自由」は翻訳語として明治期に使われ始めて以降、元来ない概念だったからこそステキな概念として、深く理解されないまま日本の慣習や情緒を引きずりながら社会に定着して現在に至る。それでも人は、言葉がある故に「自由」「権利」という客観的な実体があると思い、自分の考える「自由」や「権利」は他の言語を話す異文化の人たちと同じであると思ってしまう。

異文化間の共通理解の認識も、齟齬も言葉から生まれる。異文化を理解でき、世界中の人たちとコミュニケーションがとれるグローバルな人間になることは、母語と外国語の双方で言葉への感受性を高めることから始まる。

ノースウエスタン大学心理学部コロ(1994年)。専門は、言語心理学、発達心理学、認知科学。著書に、「ことばと思考」(岩波新書)、「ことばの発達の謎を解く」(ちくまプリマー新書)、「ことばを覚える仕組み―母語から外国語まで」(筑摩学芸文庫)、「新人が学ぶということ―認知学習論の視点」(北橋出版ほか)。

(注1)柳父章「翻訳語成立事情」(岩波新書)

(注2)「グローバル」という語自体が、現代社会において意味が曖昧でそれゆえに「ステキ」に聞こえるが、誰もあまり深くその意味を理解していない言葉の典型だろう。